

古英語 *geswencan* とラテン語 *afficere* について

石 原 覚

I

以下に引用したのは、イエスが使徒たちに彼らが被るであろう迫害の予告をするくだりの古英語の一文と、それが基づいていると考えられる¹ウルガータ (Vulgata) のマタイ福音書の一節である。古英語訳の *mid deaðe geswencan* (死をもって苦しめる) がラテン語原文の *morte afficere* (殺す, 死刑にする) に対応しているのがわかる。

- (1) *þonne læweþ broþer oþerne hæpnum on deap, & sunu se læweþ his fæder, & þa gingran arisaþ wiþ þam ylðrum, & hie mid deaþe geswencap; (LS 32 (PeterandPaul) 17)*²

「さらに兄弟は他の兄弟を異教徒たちに売り渡して死なせ、子は自分の父を裏切り、年下の者たちは年上の者たちに対して立ち上がり、彼らを死をもって苦しめるであろう。」

*tradet autem frater fratrem in mortem / et pater filium / et insurgent filii in parentes et morte eos adficiant (Mt 10.21)*³

「また兄弟は兄弟を、父は子を、死へと引き渡すであろう。そして子らは両親に対して立ち上がり、彼らを殺すであろう。」

- (1)の “... *hie mid deaþe geswencap*” を、R. Morris⁴ および R. J. Kelly⁵ は、ともに “... torture them to death” (……彼らを死に至るまで苦しめる[であろう]) と現代英語に翻訳している。本稿では、この現代英語訳には問題があるということ、(ge)swencan と *afficere* との対応関係、ならびに (ge)swencan の同義語である古英語 (ge)wæcan と *afficere* との対応関係をそれぞれ調べることにより明らかにしたい。

II

まず古英語 (ge)swencan と gewæcan は「疲労させる」の意味を共有する。この意味は、例えば以下の(2)(3)における、ともにラテン語原文⁶の *fatigare*（疲労させる）に由来する *geswencan* と *gewæcan* に認められる。

(2) *ure fæder biddeð, þæt ge eow on þone weg ne geswencean.* (GD 1 (H) 4.39.14)⁷

「われらの父[教皇]は、あなたがたが旅に出て苦勞するのを望みません。」

(3) *ða þa hy þa gyta foron fyrr on hyra weg, & seo lætre tid hi gangende gewæhte,* (GD 2 (H) 13.128.32)

「彼らがさらに先へと旅を続け、時間が経って、進み行く彼らを疲労が捉えたとき、」

(2)は、*An Anglo-Saxon Dictionary: Supplement*⁸ の *geswencan* I. (1) の「(労働や負傷により) 苦痛や疲労などを与える」(“to cause distress, fatigue, &c., by labour, or any injury to the body”) の語義のもとに、(3)は、同辞典の *gewæcan* I. (1)(a) の「(労働や旅などにより) 疲労させる、疲れ果てさせる」(“to weary, exhaust with labour, travel, &c.”) の語義のもとに、それぞれ引用されている例である。

さらに (ge)swencan と (ge)wæcan は「苦しめる」の意味を共有する。これらの語は、この語義において、以下の(4)―(7)が示すように、肉体と精神のどちらについても用いられる。(4)では病の末の肉体について、(5)では罪で汚された魂について、*geswencan* は用いられている。

(4) *æfter þysum wordum gewat seo sawl of þam geswenctan lichaman gesælig to heofonum.* (ÆLS (Martin) 1369)⁹

「これらの言葉の後その魂は、苦しめられた肉体から天へと幸福に旅立った。」

(5) *if þæra misdæda beoð ma, þonne þæra oðra, þonne willað þa deoflu habban þa geswenctan sawle;* (HomU 39 86)¹⁰

「もし悪行が他方[善行]より多ければ、悪魔たちはその苦しめられた魂を得るであろう。」

(6)では老年期の肉体について、(7)では流刑者たちの心について、*gewæcan* は用いられている。

- (6) his swura aslacod. his neb bið gerifod. & his leomu ealle *gewæhte*; His breost bið mid siccetungum gepread. (ÆCHom I, 40 528.113)¹¹

「首はぐらつき、顔にはしわが寄り、四肢はみな傷む。胸は吐息で責められ、」

- (7) Ða ða he mid tihtendlicum wordum heora *gewæhtan* mod getrymde & gefrefrode; (ÆCHom I, 37 499.67)

「彼が説得力のある言葉で彼らの苦しめられた心を強め、慰めたとき、」

ラテン語 *afficere* の原義は、*Oxford Latin Dictionary (OLD)*¹² が *afficio* 1 において、下の(8)を挙げて示すように、「…に物理的効果をもたらす、…に影響を与える」(“To produce a physical effect on, make an impression on, affect, influence”)である。この例で *afficere* は、雷鳴が耳に響くことについて用いられている。

- (8) inde sonus sequitur qui tardius *adficit* auris / quam quae perveniunt oculorum ad lumina nostra. (Lucr. 6.183)¹³

「そして音が続くが、これは、我々の視覚に届くもの[稲妻]より、より遅く耳に達する。」

次いで *afficere* は、特に悪影響について、すなわち「苦しめる」の意味で用いられる。この意味で *afficere* は、(ge)swencan と (ge)wæcan のごとく、肉体・精神のどちらにも使用される。例えば以下の(9)(10)において、この動詞は、それぞれ戦場の兵士たちの肉体について、長引く疫病下での肉体と精神について用いられている。

- (9) ita ut prius aestus a meridiano sole laborque standi sub armis et simul fames sitisque corpora *adficerent* (Liv. 28.15.4)¹⁴

「そのため[敵と交戦するより]先に、真昼の太陽の熱、武装して立ち続ける負担、そして同時に飢えと渇きが、肉体を苦しめていた。」

- (10) cum piaculorum magis conquisitio animos quam corpora morbi *adficerent*, (Liv. 7.3.3)¹⁵

「病が体を苦しめる以上に、贖罪を探し求めることが心を悩ませていたので、」
これら2例は、*OLD* の *afficio* 5 の「…に有害な効果をもたらす、苦しめる、傷つける」(“To produce a harmful effect on, cause to suffer, cause hurt to”)において挙げられているものである。

このように古英語 (ge)swencan, (ge)wæcan とラテン語 *afficere* は「苦しめる」の意味を共有するため、*afficere* はしばしば (ge)swencan ないしは (ge)wæcan へと訳される。例えば以下の(11)(12)の swencan と wæcan は、並べて引用したラテン語原文の、悪い影響について用いられた *afficere* に由来している。

- (11) *ærest heo swæncep hi sylfe mid tearum, þonne heo gemynað þa gyltas hire yflan dæda & ondrædeþ, þæt heo scyle for þam þrowian þa ecan cwicsusla; (GDPref and 3 (C) 34.244.28)*

「それ[神の王国を渴望する魂]は、自らの悪行の罪を想起し、そのために永遠の罰を受けるのではないかと恐れるとき、先ず泣いて自らを苦しめる。」

*Prius enim sese in lacrimis afficit, . . . (GREG.MAG. Dial. 3.34.2)*¹⁶

「つまりそれ[神を渴望する魂]は、……先ず泣いて自らを苦しめる。」

- (12) *Com se foresprecena hungur eac swylce hider on Bryttas & hi to ðon swyþe wæhcte, þæt heora monige heora feondum on hand eodan; (Bede 1 11.48.19)*¹⁷

「前述した飢饉はこちらブリトン人のもとにも至り、彼らを酷く苦しめたので、彼らの多くが敵の手に落ちた。」

*Interea Brettones famēs sua praefata magis magisque afficiens, . . . (BEDA. Hist.eccl. 1.14, 46)*¹⁸

「その間、前述した飢饉はますますブリトン人を苦しめ、……」

III

ここで注目すべきことは、*afficere* が、手段の表示である奪格をしばしば伴うという事実である。例えば次の(13)——戦役での略奪品の明細を元老院で読み上げるといふ行為についての、或る高名な軍人の言葉——において、*afficere* は *contumelia*（辱め）の奪格を伴っており、これは直訳すれば「辱めをもって」を意味する。

- (13) “*Sed enim id iam non faciam,*” inquit, “*nec me ipse afficiam contumelia,*” (Gel. 4.18.11)¹⁹

「『だが私は今それをするつもりはない』と彼は言った、『また自分で自分を辱めるつもりもない』。』」

また次の(14)に示した、獲物を配分するライオンの寓話の一節では、直訳すれば「災いをもって」を意味する *malum* の奪格とする *afficere* の例が見られる。

(14) *malo adficietur si quis quartam tetigerit.* (Phaed. 1.5.10)²⁰

「4番目[の部分]に触れる者は、誰であれ酷い目に遇うであろう。」

(13)(14)は、OLD の *afficio* 4 の「(奪格とともに、人を、不名誉、不運など)に巻き込ませる」(“(w. abl.) To cause (a person) to be involved in (disgrace, misfortune, etc.)”)に挙げられている例である。また次の(15)の、殺人者の処罰についての記述において *afficere* は、直訳すれば「罰をもって」を意味する *poena* の奪格を伴っている。

(15) *num poena videatur esse afficiendus, qui civem ex senatus consulto patriae conservandae causa interemerit,* (Cic. *de Orat.* 2.31.134)²¹

「元老院決議に従い、祖国を守るために、市民を殺害した者は、罰せられるべきと見なされるか否か、」

さらに以下の(16)の、市民の殺戮を述べるくだりにおいて、この動詞は、直訳すると「死をもって、拷問をもって、十字架をもって」を意味する *mors*, *cruciatu*, *crux* のそれぞれ奪格とともに用いられている。

(16) *cum cives Romanos morte, cruciatu, cruce affecerit,* (Cic. *Ver.* 1.4.9)²²

「彼はローマ市民を殺し、拷問にかけ、磔刑に処したのではあるが、」

(15)(16)は、OLD の *afficio* 4.b の「(*morte*, *cruciatu*, *poena* などとともに、死、拷問、罰など)を科する」(“(w. *morte*, *cruciatu*, *poena*, etc.) to visit with (death, torture, punishment, etc.)”)に引かれている例である。

同時に注目すべきは、(ge)swencan と (ge)wæcan が、手段を表す前置詞句、すなわち *mid* とその目的語である与格を伴うことがあるという事実である。例えば次の(17)に挙げた、出エジプト記 8 章で神がファラオを罰したことに触れた一文で、*geswencan* は *mid* とその目的語の *gesceaft* (生き物) の複数与格を主要語とする語群を伴っている。

(17) *se ælmihtiga ðone modigan cyning mid þam eadelicum gesceaftum swa geswencte.* (ÆCHom II, 12.1 111.60)²³

「全能者は高慢な王を取るに足らぬ生き物[蛙・蚊・蠅]によってこのように

苦しめた。」

また次の(18)において、世俗の喜びを損なうことについて用いられた *gewæcan* は、*mid* とその目的語の *caru*（心配）の与格を中心とする語群を伴っている。

- (18) *Heo hæfð ðonne sibbe on hire dæge þonne heo nele þa andwerdan myryhðe gewæcan mid nanre care þære toweardan ungesældæ; (ÆCHom I, 28 414.120)*

「つまりそれ[邪悪な魂]は、自分の日に平和を保っているが、この時それは現在の楽しみを未来の不幸に対する懸念により圧迫しようとはしない。」

さらに下の(19)で、動物に傷を負わせることについて用いられた同じ動詞は、*mid* により支配された *flan*（矢）および *wæpen*（武器）のそれぞれ与格を中心とする語群とともに用いられている。

- (19) *gyf man on huntupe ran oððe rægean mid flane oððe oðrum wæpne gewæceþ (Lch I (Herb) 63.4)²⁴*

「狩猟において人が、雄または雌のノロジカを、矢または他の武器により傷めると」

IV

IIIから認められるのは、手段の表示としての奪格を伴う *afficere* が、同じ表示である *mid* とその目的語の与格を伴う *(ge)swencan* ないしは *(ge)wæcan* へと訳されるならば、ラテン語原文の手段の意味が古英語に反映されているということである。以下の(20)―(22)に、実際にこの訳し方がなされている例を、古英語訳とラテン語原文を並べて示そう。

(20)は、民の不平と神の怒りの狭間で絶望する、モーセから神への嘆きの言葉である。この箇所において *afficere* は、(14)に挙げた古典時代の例におけるごとく、直訳すれば「災いをもって」を意味する *malum* の複数奪格を主要語とする語群を伴っている。この *afficere* は、*mid* とその目的語の *yfel*（災い）の与格を主要語とする語群を伴う *geswencan* へと訳されている。

- (20) *ic bidde ðe ðæt ðu me ofslea & ic hæbbe gyfe beforan ðe, þæt ic ne sy mid swa miclum yfele geswenct. (Num 11.15)²⁵*

「[[このままでいいと考えるなら]どうか私を殺して、あなたの前に恵みを得

させてください。これほど大きな災いをもって苦しめられぬように。」

... *ne tantis afficiar malis*. (Nm)

「……これほど大きな災いに見舞われぬように。」

(21)は異教徒たちにより聖人が拷問を受けるくだりである。ここにおいて *afficere* は、(16)に示した古典時代の例で *cruciatus* (拷問) の奪格を伴っているように、直訳すれば「拷問をもって」を意味する *tormentum* の複数奪格を主要語とする語群と共起している。この *afficere* は、*mid* に支配された *swingel* (打撃) と *tintreg* (拷問) のそれぞれ複数与格が主要語の語群を伴う、*wæcan* により表されている。

(21) *Ða he ða mid grimnum swinglum & tintregum wæced wæs, & he ealle þa witu, ðe him man dyde, gepyldelice & gefeonde for Drihtne abær & aræfnde*. (Bede 1 7.36.33)

「それから彼は激しい打撃と拷問をもって責められたが、彼は加えられたすべての苦しみを、辛抱強く、また喜んで、主のために耐え忍んだ。」

Qui cum tormentis afficeretur acerrimis, ... (BEDA. Hist.eccl. 1.7, 30)

「彼は極めて激しい拷問を加えられても、……」

(22)は、マタイ福音書の「婚宴の譬え」において、招かれた者たちから呼びに来た王の僕たち^{しもべ}への虐待を述べる一節である。(13)に引いた古典時代の例に比べると同じく、(22)の *afficere* は、直訳すれば「辱めをもって」の意味の *contumelia* の奪格とともに(ここではギリシャ語原典の ὑβρίζειν (辱める) の訳語として)用いられている。このラテン語の表現は、*mid* と *teona* (危害、辱め) の与格を伴う *geswencan* により訳されている。

(22) *þa opre namon hys þeowas & mid teonan geswencton & ofslogon*; (Mt (WSCp) 22.6)²⁶

「その他の人々は彼の僕たちを捕らえて、辱めをもって苦しめ、殺した。」

... *et contumelia adfectos occiderunt* (Mt)²⁷

「……辱めを加え、殺した。」

なお(22)の *contumelia afficere* は、ÆCHom I, 35においても同様に *mid teonan gewæcan* (辱めをもって苦しめる) により訳されている。²⁸

V

問題の(1)に戻ろう。(1)において *afficere* は、(16)の古典時代の例におけると同じく、直訳すれば「死をもって」の意味の *mors* の奪格 *morte* とともに（ここではギリシャ語原典の θανάτου (殺す，死刑にする) の訳語として²⁹⁾ 用いられている。そしてこの *morte* を伴う *afficere* は、*mid* と *deað* (死) の与格 *deaðe* を伴う *geswencan* へと訳されている。

同種の例を挙げよう。下の(23)は、古英語訳マルコ福音書における(1)の平行箇所をウルガータの対応箇所とともに示したものである。(1)におけると同様、*morte afficere* は *mid deaðe gewæcan* (死をもって苦しめる) へと表されている。

(23) Soðlice se broðor þone broþor to deaðe sylð & se fæder his sunu & þa bearn arisað agen hyra magas & *mid deaðe* hi *gewæceað*. (Mk (WSCp) 13.12)

「まことに兄弟は兄弟を，父は子を死へと引き渡すであろう。そして子らは両親に対して立ち上がり，彼らを死をもって苦しめるであろう。」

... et consurgent filii in parentes et *morte adficiant* eos (Mc)

「……そして子らは両親に対して立ち上がり，彼らを殺すであろう。」

従って(1)およびこの(23)においては，上記(20)―(22)におけると同様，ラテン語原文の手段の意味が古英語訳に反映されていると言える。

その一方で，*morte afficere* が，このように古英語に訳されないケースも見られる。迫害・殉教の死について述べられた以下の(24)(25)の古英語訳および対応するラテン語原文において，*afficere* はそれぞれ *geswencan*, *gewæcan* に訳されているが，*morte* は，(1)(23)におけるごとく，*mid deaðe* (死をもって) にではなく，*to deaðe* (死に至るまで) に訳されていることに注意されたい。

(24) Ge beoð gesealde fram magum & gebroðrum & cuðum & freondum, & hig eow *to deaðe geswenciað*. (Lk (WSCp) 21.16)

「あなたたちは両親，兄弟，親族や友人たちから引き渡されるであろう。また彼らはあなたたちを死に至るまで苦しめるであろう。」

... et *morte adficiant* ex vobis (Lc)

「……また彼らはあなたたちのある者たちを殺すであろう。」

(25) For þe, drihten, we synd ealne dæg *to deaþe gewæhte*; we synd *to deaþe getealde*

swa swa sceap to gesnide (BenR 7.27.8)³⁰

「主よ、あなたのために我らは終日死に至るまで苦しめられている。我らは屠られる羊のごとく、死ぬべきものと見なされている。」

Propter te morte adficimur tota die, . . . (BENEDICT. Reg. 7.38)³¹

「あなたのために我らは終日殺されている。……」

さらに②4の *morte afficere* は、ÆCHom II, 42 においても同様に *to deaðe gewæcan* (死に至るまで苦しめる) に訳されている。³² これらにおいては、ラテン語原文の直訳すれば「死をもって」の意味が反映されておらず、*afficere* が伴う奪格が示す手段の意味は結果の意味へと意識されている。³³

ラテン語原文の *morte afficere* に由来する(1)の *mid deaðe geswencan* と②3の *mid deaðe gewæcan* においては——同じラテン語の表現に基づくが意識がなされている②4の *to deaðe geswencan* や②5の *to deaðe gewæcan* におけるのとは異なり——*afficere* と共起する奪格の持つ手段の意味が *geswencan*, *gewæcan* と共起する *mid* と与格に反映されている。しかるに Morris および Kelly による(1)の “... *hie mid deaþe geswencap*” への “... *torture them to death*” という現代英語訳には、その手段の意味が生かされていない。³⁴ 結論として、ラテン語原文の意味が古英語訳に反映されていることが表されていない点で、この現代英語訳の箇所には問題があると言わざるを得ない。

注

1. A. S. Cook, *Biblical Quotations in Old English Prose Writers*, Second Series (New York, 1903; repr. Folcroft, Pa., 1974), p. 28 参照。
2. R. Morris, *The Blickling Homilies*, EETS 58, 63, 73 (London, 1874–80; repr. as 1 vol. 1967), p. 171. 古英語およびラテン語原文のテキストの略記と引用の仕方は, *DOE* (A. Cameron et al., *The Dictionary of Old English: A to F* (Toronto, 2003)) に従う。なお本稿における古英語およびラテン語の引用中のイタリック部分は, すべて筆者によるものである。
3. ラテン語訳聖書からの引用は, R. Gryson et al., *Biblia Sacra iuxta vulgatam versionem*, 4. Aufl. (Stuttgart, 1994) による。ただし⑳では古英語のテキストに併記されたものによる。
4. Morris, p. 170: “. . . and the youngers shall rise against the elders, and shall torture them to death” 参照。
5. R. J. Kelly, *The Blickling Homilies* (London, 2003), p. 121: “. . . and younger ones will arise against their elders and torture them to death” 参照。
6. ラテン語原文 GREG.MAG. Dial. の該当箇所は 1.4.17, 2.13.2 (A. de Vogüé, *Grégoire le Grand: Dialogues*, t. 2, SChr 260 (Paris, 1979), pp. 54, 178) である。
7. H. Hecht, *Bischof Wærferths von Worcester Übersetzung der Dialoge Gregors des Grossen*, Bib. ags. Prosa 5, 1. Abt. (Leipzig, 1900; Nachdr. Darmstadt, 1965).
8. T. N. Toller, *An Anglo-Saxon Dictionary: Supplement* (Oxford, 1921).
9. W. W. Skeat, *Aelfric's Lives of Saints*, vol. 2, EETS 94, 114 (London, 1890–1900), p. 304.
10. A. Napier, *Wulfstan*, Sammlung englischer Denkmäler 4 (1883; Nachdr. Dublin, 1967), p. 249.
11. P. Clemoes, *Ælfric's Catholic Homilies: The First Series, Text*, EETS s.s. 17 (Oxford, 1997).
12. P. G. W. Glare, *Oxford Latin Dictionary* (Oxford, 1982).
13. W. H. D. Rouse, *Lucretius: De Rerum Natura*, rev. M. F. Smith, Loeb Classical Library (LCL) 181 (Cambridge, Mass., 1992), p. 506.
14. F. G. Moore, *Livy: History of Rome*, books 28–30, LCL 381 (Cambridge, Mass., 1949), p. 64.
15. B. O. Foster, *Livy: History of Rome*, books 5–7, LCL 172 (Cambridge, Mass., 1924), p. 364.
16. de Vogüé, p. 400.
17. T. Miller, *The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History of the English People*, pt. 1, 1, EETS 95 (London, 1890).
18. B. Colgrave and R. A. B. Mynors, *Bede's Ecclesiastical History of the English People* (Oxford, 1969).
19. J. C. Rolfe, *Aulus Gellius: The Attic Nights*, books 1–5, rev. ed., LCL 195 (Cambridge, Mass., 1946), p. 370.
20. B. E. Perry, *Babrius and Phaedrus*, LCL 436 (Cambridge, Mass., 1965), p. 198.

21. E. W. Sutton, *Cicero: De Oratore*, books 1–2, completed by H. Rackham, rev. ed., LCL 348 (Cambridge, Mass., 1948), p. 294.
22. L. H. G. Greenwood, *Cicero: The Verrine Orations*, vol. 1, LCL 221 (Cambridge, Mass., 1928), p. 130.
23. M. Godden, *Ælfric's Catholic Homilies: The Second Series, Text*, EETS s.s.5 (London, 1979).
24. H. J. de Vriend, *The Old English Herbarium and Medicina de Quadrupedibus*, EETS 286 (London, 1984), p. 106.
25. S. J. Crawford, *The Old English Version of the Heptateuch*, EETS 160 (1922; repr. London, 1969).
26. 古英語訳福音書 (WSCp) からの引用は W. W. Skeat, *The Gospel according to Saint Matthew and according to Saint Mark; The Gospel according to Saint Luke and according to Saint John* (Cambridge, 1871–87; Nachdr. Darmstadt, 1970) による。
27. ウルガータの福音書ではさらに、「悪しき農夫たちの譬え」において、収穫を受け取りに来た僕への虐待につき、*contumelia* の複数奪格を用いた *contumeliis afficere* (Mc 12.4) と *contumelia afficere* (Lc 20.11) が (ここではともにギリシャ語原典の ἀτιμάζειν (辱める) の訳語として) 見出される。古英語訳福音書において、前者は "... hi þone on heafde gewundodon & mid teonum geswencton (Mk (WSCp) 12.4)" (……彼らはその者の頭を傷つけ、辱めをもって苦しめた) のごとく mid と teona の複数与格を伴う *geswencan* へ、後者は "... þa beoton hig ðæne & mid teonum gewæcende hine forleton idelne (Lk (WSCp) 20.11)" (……彼らはその者を打ちたたき、辱めをもって苦しめ、空しく帰した) のごとく同じ句を伴う *gewæcan* へ——すなわち両者とも②におけると同様「辱めをもって苦しめる」の意味に訳されている。
28. "sume eac gelæhton þa ærendracan. & mid teonan hi gewæhton & ofslogon (476.11)" 参照。
29. ウルガータの新約には、合計3例の *morte afficere* が見られるが、(1)以外の2例 (Mc 13.12, Lc 21.16) もこのギリシャ語の訳語として用いられている。
30. A. Schröer, *Die angelsächsischen Prosabearbeitungen der Benediktinerregel*, Bib. ags. Prosa 2 (Kassel, 1885–88; Nachdr. Darmstadt, 1964).
31. R. Hanslik, *Benedicti Regula*, ed. altera, CSEL 75 (Vindobonae, 1977), p. 50. ただしこのラテン文は、ウルガータ以前の古ラテン語訳 (Vetus Latina) の詩篇の一節 (PsRom 43.22) を引用したものであり、ここの *morte afficere* も、ウルガータの新約におけるそれと同じく、ギリシャ語原文 (ここでは七十人訳聖書 (Septuaginta)) の θανατοῦν の訳語として用いられている。
32. "Ge beoð belæwede fram fæderum. and gebroðrum. and fram magum. and hi eow to deaðe gewæcað (313.99)" 参照。なおこの古英語訳は B. Thorpe, *Ælfric: Sermones Catholici*, vol. 2 (London, 1846; Nachdr. Hildesheim, 1983) では, "... they shall drive you on to death (p. 543)"

（……彼らはあなたたちを死へと追いやるであろう）と、gewæcan の「苦しめる」の意が無視されて現代英語に翻訳されているが、これはこの to deaðe gewæcan が基づく morte afficere およびその原語の θανατοῦν の意味（殺す、死刑にする）が意識されたためと考えられる。これに対して、H. Leo, *Angelsächsisches Glossar* (Halle, 1877), s.v. gewæcan では、この古英語表現に “zu Tode martern”（死に至るまで苦しめる）と適切な意味が与えられている。

33. ㉔は、DOE, s.v. *deap* 8.a において、“to death”を意味する表現が、「結果を表す副詞的拡充として」（“as adverbial extension expressing result”）、運動や行為の動詞とともに用いられた例の中に挙げられている。
34. これに対して、H. C. Leonard, *A Translation of the Anglo-Saxon Version of St. Mark's Gospel* (London, 1881) における、㉔の “... mid deaðe hi gewæceað” への現代英語訳 “... afflict them with death (p. 72)”（……彼らを死をもって苦しめる[であろう]）では、古英語訳に反映されたラテン語原文の手段の意味が、適切にそのまま生かされている。